

### インドネシア外交官・行政官来館

2月24日、インドネシア共和国から24名の方がお見えになりました。この日午前中に、外交官が10名、午後は14名の行政官と昼食をはさんで2班に分かれて来られました。

インドネシアは、スマトラ島の「アチェ津波博物館」と「稲むらの火の館」が2年前に津波防災の情報を世界へ発信しましょう、という提携を結んだ関係です。この関係で、これまでもジャーナリストや学校の先生も来られたりしています。今回の方々は、若い人達でした。その中には、アチェ津波博物館の館長も居ました。現館長は、提携調印式や、アチェでの「稲むらの火コーナー」設置後に着任された方でした。若い人達は、「稲むらの火」や津波防災などについて、いろいろ質問されました。



この様子は、テレビ和歌山「国土強靱化は郷土を守る」の番組制作の「和通」社が取材撮影、3月3日、10日の夜に放送されました。

~~~~~

### 「濱口梧陵」がカルタに !!

土木学会誌3月号に「稲むらの火」濱口梧陵一堤防築造は津波防災と就労対策一として取り上げられました。これは、「覚えよう！土木偉人」のコーナーですが、連載された他の偉人と共に、カルタとしても制作されました。防災ではないですが、カルタとりをしながら偉人の活躍が学べます。学会誌は「館」にあります。

### 銚子市長、御来町

千葉県銚子市の越川市長様が職員2名と共に広川町へ来られました。町内の名所を見学されましたが、「稲むらの火の館」へも来られました。松林教育長、星畑総括課長等がお出迎えました。館内では、3D映画等ゆっくり見学していただきました。

「広村堤防」「東濱口家住宅」「広八幡神社」等々見学されました。

館長も2年前に、私的に銚子を訪問して、ヤマサ醤油の工場見学や、外川の「ミニ郷土資料館」訪問した時の思い出話をさせていただきました。外川は広村の崎山次郎右衛門が漁場開拓や町づくりをしたものです。



\*\*\*\*\*

### 「第8回稲むらの火講座」終了

3月17日、第8回稲むらの火講座を開催しました。今回は関西大学社会安全学部准教授の奥村与志弘先生にお願いをしました。

『広川町だからできる安全・安心なまちづくりー「企業・地域・行政の強み」と「太陽の防災」ー』という演題でした。

「太陽の防災」というのは、童話「北風と太陽」から応用したものだということです。

だから「北風の防災」というのは津波の時には避難しなければ犠牲になるというように脅して訓練に参加するように呼びかける、事をいう。反対に「太陽の防災」は皆が明るく防災を考えるというような意味でした。今後の防災の指針になるものでした。



濱口大明神縁起 (その15)

濱田康三郎 (かわせみより)

『デイオシイ氏の申された通り、ハーン氏のハマグチ・ゴヘイと私とは、正しく父子の関係にあるのであります。ハマグチ・ゴヘイは、正確には私の父濱口儀兵衛であります。聞くところによれば、ハーン氏は父の事績を記した文章を新聞紙上で読み、それに暗示を得て、氏一流の麗筆を揮つてあの物語を創作せられたのだとか。従つて儀兵衛の名をゴヘイと改めたのは、作者としての常套手段によつたのであり、大津波の折の出来事の大部分も、ハーン氏自身の想像に基いているのであります。然し、それだからと云つて、私はハーン氏に対して不平がましいものを毛頭抱いているわけではありません。いや、それどころか、氏がかの名文をもって、事実そのものに多くの潤色を施し乍ら、精神は少しもかえずに、父の小さい功績を世界中に紹介して下さった労苦に対し、喪心感謝してゐるのであります。』

『ロレッツ嬢のご質問もありましたし、デイオシイ氏は、此の席上で私の口から直接皆様に、父のあの折の活動振りをお伝えするようと、たつての御勧めであります。が、それは私にとっては絶対的に不可能であります。実際、私が今こうしてこのところに立っているのですえ、あり得べからざる事柄なので、私の現在成し得る精一杯のことは、抑え切れない感激の涙を抑えながら、皆様の前に無言のお辞儀をして引き退くことなのであります。』

此処で彼は口を閉じて、幾度となく両の目蓋を拭い、乱れた心を無理に取り鎮めて、

『けれども、淑女紳士諸君。それにしては、私には気がかり千万な事柄が一つあります。それは——ハーン氏の物語の主人公は、今から百年以上も昔の人物となっているのです。もしそれを事実とするなれば、私の言葉に偽のあるのではない限り、どうして彼に私のような年若い息子を持ち得る訳があらましようか。皆様が第一番にお起しになる疑問は、これであろうと存じま

す。私は皆様が私をお疑いになるであろうを、何よりも懸念します。それで私はとに角ハーン氏の物語と実際の事実との相違点その他を——詳細は、何分にも私の誕生以前に起こった事柄ではあり、私自身に知っている筈がありませんから、さし当り父の生前の談話に聞いたところをもとと仕て——思いつくまま簡単にお話することに決心致しました。』

彼は少年の日の古い記憶を呼び起こそうと時々小首を傾げては、適切な外国語の表現の咄嗟の場合に考えつき難いのを焦だちながら、語り進んだ。

私の父はハマグチ・ゴヘイでなくて、濱口儀兵衛(第七代)と申しました。然し、父は晩年に改めた梧陵という名前の方が、よりよく知られています。紀州有田郡広村と呼ぶ、大阪の直南約五十里の、日本の太平洋沿岸にある小さい村の産であります。私共の一家は同村に三百有余年の間住居を定めている舊家の一で、父は村長ではなかったけれども、最も有力な長者の一人として、早くから村のために尽くすところが多かつたそうであります。

ハーン氏の物語に記されてある大津波は、一八五四年(安政元年)十一月五日の出来事でした。此の大津波については、父の委しい手記が残って居ります。それによると、事実はハーン氏の筆にせられたのより遥かに惨憺たるものでした。此の一八五四年の大津波は、その十一月四日畿内及び東海、東山両道の諸国にあつたそれに引続いて、翌五日南海、西海、山陽、山陰四道の諸国に起こつた大地震のために、海潮が暴溢して、瀬海の町々村々に多大の災害を被らせたものであります。広村でも四日の午前十時頃強震が有り、人々は津波の襲来を案じて村を立退き、近在に避難をしたのですが、翌五日夕刻に至り又しても激しい大地震があつて、歴史的な大津波をもたらしたのでした。

その日は朝からどんよとした花曇りの空でした。日没近く——午後四時頃になつて、突如として激しい大地震がありました。

(つづく)